# Katsurao Collective 新聞
カツラオ　コレクティブ　シンブン

5号　2024年3月発行
発行　Katsurao Collective
（一般社団法人 葛力創造舎）


## かつらお企画室　羊毛、ニット、藁・・・
## 村に眠る素材で楽しむあれこれ

村にある素材を使って、参加者とアーティストが一緒に手を動かしてつくる喜びを共有するワークショップ「かつらお企画室」。2023年下半期も、さまざまなテーマで開催しました。

11月12日(日)に開催したのは「地元の羊の毛を洗おう！つむごう！つくろう！」。全国各地で羊の毛を使ったプロジェクトを展開している人気講師、吉田麻子さんをお迎えしました。使う素材は、もちろん葛尾村の特産「メルティシープ」の羊毛です。体験したのは、羊毛を洗ってごみを取り除き、紡いで糸にしていく作業です。実際に自分で触って紡いでいくことで愛着が湧き、参加者同士でも自然にコミュニケーションが生まれている…そんな光景が印象的でした。

11月25日（土）には、KatsuraoAIRのアーティストトークや、せせらぎ荘で行われたビア&ワインフェスと連動した企画「ここにつどう 旅する金のサーバー」を開催。村内で人々が「つどう」とき、そこには黄金のサーバーがある…そんなイメージを思い描きながら、春から村内各地で実施した「ここにつどう」シリーズの2023年最後の活動となりました。

11月26日（日）には、村内のニット工場で出るニットの残糸を使って空間を彩るワークショップ「糸を編もう、場所を編もう」が行われました。講師は、布や糸を素材として制作する美術家で染色作家の関美来さん。段ボールでつくられた簡易編み機で、参加者それぞれの個性を生かした作品が出来上がりました。

12月3日（日）には、葛尾村のお父さんたちに藁もじりを教えてもらおう！という年末の恒例企画「葛尾村の稲で正月飾りをつくろう」を実施しました。講師のひとり、遠藤英徳さんのインタビューは「Katsurao Collective report 2023」という冊子に掲載される予定です。葛尾中学校校舎や復興交流館あぜりあ等で配布するほか、ウェブサイト上にもアップいたしますので、お楽しみに！

## スタッフ紹介

**山口 貴子（キュレーター）**

岐阜県出身。アーティストとして国内外の芸術祭やアーティストインレジデンスプログラム（AIR）に参加しつつ、AIRと地域との関係性や運営形態についてのリサーチをおこなっています。地方地域での文化振興事業の運営に関心があり、中之条ビエンナーレ（群馬県）にてチーフキュレーター、地域の学校と連携したエデュケーションプログラムなどを担当してきました。葛尾の寒い冬が大好きです。

雪の降った朝は朝日に反射した雪の結晶から出る光を撮影するために散歩しているとおもいますので、行き倒れてたら助けてください。笑　よろしくお願いいたします。

## 編集後記

Katsurao Collectiveが活動を開始して早2年が経とうとしています。少し難しいと感じることもあるアートですが、身近に、楽しく感じていただけるような発信をしていきたいと思います。今後ともKatsurao Collectiveをよろしくお願いいたします！

（PR担当　阪本）

## あぜりあトレーラーハウス
### アートな村の新しい「顔」に！

12月22日（金）、アーティスト・デザイナーのYORIKOさん率いるデザインチーム「ニューモア」によるウォールアートプロジェクトのお披露目が行われました！

葛尾村復興交流館あぜりあに現れたのは、自然の中でゆかいにたたずむ動物たちのイラストです。かつて馬産地だった記憶がよみがえるお馬さん、葛尾村の名産となっている羊や牛、農地の地力回復のために植えられるクリムゾンクローバー、鳴き声が聞こえてきそうなカエル、美しい山河。よく見ると、「これは…？」と気になってしまう謎の生命体（!?）も！

普段は、主に福祉施設で利用者のみなさんが描いた絵をデザインに展開する取り組みを行っているニューモアのみなさん。YORIKOさんいわく、「葛尾村にいる『かもしれない』動物たち」が今回の作品のコンセプトです。葛尾村立葛尾小学校のみなさんが描いたイラストを原画として使い、トレーラーハウスの東西南北4面を彩っていただきました。

子どもたちの創造性と村の歴史や自然環境が溶け合う、すばらしい作品になりました。

YORIKOさんは実際に葛尾村に滞在してみての感想として、「空気が澄んでいて気持ちいいところですね。また来ます！」とさわやかに伝えてくれました。

ニューモアのみなさま、ありがとうございました。またいつでもお待ちしています!!

「Katsurao Collective 2023 活動報告展 vol.2」を復興交流館あぜりあにて開催中です。これまで葛尾村で活動したアーティストたちの作品をご覧いただけます。2024年1月21日（土）までも同様の報告展を実施していましたが、1月27日（土）からは展示の内容が変わっています。

前回の報告展にお越しいただいた方も、そうでない方も、ぜひお気軽にお立ち寄りください。

会場：葛尾村復興交流館あぜりあ
交流スペース1
日程：2024年1月27日（土）～3月31日（日）
（予定）
午前9時－午後5時
※閉館日はあぜりあの休館日に準ずる
（原則毎週月曜日）
アーティスト：太田裕司　尾角典子　工藤将亮
山田悠　石川洋樹
入場：無料

## Katsurao Collective 2023
## 活動報告展 vol.2 開催中！

# Katsurao AIR
# 2023年11月滞在

アーティストが葛尾村に滞在してリサーチや制作を行うアーティスト・イン・レジデンス・プログラム「Katsurao AIR（カツラオエアー）」。11月の1か月間は、3名のアーティストが葛尾村で暮らし、それぞれの視点から制作に取り組みました。11月24日（金）から26日（日）の3日間は葛尾村復興交流館あぜりあと、葛尾村立葛尾中学校校舎にて活動報告会を開催し、たくさんの方にご来場いただきました。また、11月17日（金）には、葛尾村を飛び出して大熊インキュベーションセンターでのアーティストトークを実施。これまでの取り組みや、制作過程のなかで思うことについて語っていただきました。ご来場いただいた皆様、誠にありがとうございました。

大槻唯我（ゆいが）インタビュー

## 写真を通して場所をみつめる

―高校時代にフォトジャーナリズム（報道写真）という分野に出会ったという大槻さんですが、現在の活動（美術写真家）はまた違うものになっていますね。美大進学後、どんな変遷があったんでしょうか？

セバスチャン・サルガドという写真家の展覧会に足を運んだ際に、彼はアフリカの紛争地帯で写真を撮るんですけど、すごくその写真が美しかったんです。私が知っている報道写真というのは、もっと汚くて、美しさは要らないものだって思っていて。でも、ほんっとにきれいで。そこに写っている苦しさとか、どうしようもなさみたいなものが、伝わるんだけど伝わらないというか。リアリティがないみたいな。これでいいのかな？って思って。

でも、その展覧会は大人気でした。それはたぶん、美しさがあるから、若い人たちにも訴えるものがあるんだろうなと思ったんです。そこから、美術としての写真を突き詰めたいと思って、現在まで活動しているという感じです。

―葛尾に来て印象に残っているエピソードはありますか？

災害に関する証言集を読んでいて、死ぬなら葛尾に帰りたい、とか、葛尾の土になりたいって語っている方がいらっしゃって。実際に、共同墓地ではなく自分の土地の墓地であれば、土葬で葛尾の土に還っている方がいらっしゃるんですよね。でも、除染で5cmくらい土を剥がされている。場所にもよるんですけど、1cm土ができるのにおよそ100年かかるとすると、5cmは500年。あんまりですよね……。もちろん他にもたくさん気になっていることはあって、1か月ではまとめきれないのですが、幸か不幸か私は写真を撮るので、作品にはなります。

―今お話しいただいたこと以外にも、語りきれない大小さまざまな気づきが、作品に宿っているのかもしれませんね。写真は何を伝えるものなのか、美しいとはどういうことなのか、葛尾村での作品がそうした問いへの探究をさらに深めるものになればと思います。ありがとうございました！

Katsurao Collective では様々なメディアで発信をしています！
最新情報はこちらから

Katsurao Collective

HP　Facebook　instagram

アーティストインタビュー全編はKatsurao Collective公式noteにて記事を、各種リスニングサービスにてポッドキャスト（ネットラジオ）番組を配信中です。くわしくはQRコードを読み取ってチェックしてください！

カルティカ・メノン インタビュー

## チャイからみえてくる人と人との関係

―カルティカさんはインドご出身で、日本の企業の経理部門で勤めた後、アーティスト活動を開始されました。これまで切り絵やインスタレーションなどさまざまな手法を使っていらっしゃいますね。表現したいことや問いが先にあって、手法は後から考えるような形なんでしょうか？

まだ自分の専門のメディアは決まっていないです。「カルティカといえば切り絵だ」みたいにイメージを固めてしまうと可能性が狭まるので、まだいろいろ試している段階ですね。でも、今回のチャイとか、飲食をテーマにするのはいいなと思っています。日常的なものもメディア（媒介物）になるというのがおもしろくて。

―毎日、みんな何か食べますからね。

毎日食べてるってことは毎日アートしているってことで、そういうことに気づくとおもしろいなって。

―チャイを作ってふるまいながら、いろんな方とお話されていました。何か気づいたことはありましたか？

他の地域のレジデンスに参加した時に、偶然、その地域に友達の親戚がいたんです。すると、「○○さんの知り合いね！」ということですごく距離が近くなりました。葛尾村ではそういうことはなかったので、その中で心の壁をどうやって崩していくかということに取り組んだと思います。

人と人が信頼関係を結ぶことと、コミュニティの中に入るときの入り口が違うとコミュニケーションも変わるんだなっていうことに気づきましたね。地域とか家族とか会社とか、これまでの経験をもとに、コミュニティとかコミュニケーションのことについて考えながら過ごしました。

―インドと日本、都市と地方、企業勤めとアーティスト。いろんな「あたりまえ」の違いに直面してきたカルティカさんならではの視点ですね。これからの活動も楽しみにしています！

村上郁（かおる）インタビュー

## 折るという行為に向き合った1か月

―これまで村上さんはポストカードや電球を使った作品を制作されていますが、今回はなぜ折り紙だったのでしょうか。

葛尾村に滞在することが決まったとき、Katsurao Collective事務局から『りりりのり』（移住定住支援センターの事業で葛尾村が発行）という冊子をお送りいただいたのですが、その創刊号の巻末に、避難生活の中、みなさんが折り紙を折って作品を作っていたことが書いてありました。

私がなぜ折り紙に執着したのかというと、それには幼少期の記憶が関係しています。小学校3年生のときに、病気で3か月間入院生活をしていたことがありました。動けなくて、暇でしょうがなかったんです。みんな学校の勉強が進んでいるんだろうな……と思いながらぼーっとしているのが、置いて行かれているようで、辛くて。それで、折り紙で、人の形をした「やっこさん」を作り続けたんですね。たくさん作って、親に気持ち悪がられたりして（笑）。その過去の記憶と、避難先で折り紙を折るという行為が、つながる部分はあるなと思ったんです。

避難という体験は、私のようなよそ者には想像しきれないところもあって。でも、無理やり話を聞くのもなにか違いますよね。だから、あえてその状況にいた人と同じ行動をとってみる。私にとってはそれが入院の経験ともつながっていて、他者と同じことをするとか、忘れたことを思い出すとか、そういう試みだったと思います。